

になつたのである。

尤も、右も、簡単に新舊思想の衝突位に解釋して仕舞へばそれまでであるが、扱て其新思想の源なるものを洗つて見ると、存外上記の如き進化論の生嚙りなるものが多いので注意せねばならぬといふのである。憐むべし、現代大多數の婦女子は、統一の美名の下に、劃一主義唯物主義の教育を受け、心靈的には殆ど修養を経る暇なくして人の妻とならねばならぬのである。(吾人は現代女子教育の修身書なるものに幾何の價值をも認めて居ない。)されば彼等の思想を支配するものは、生嚙りの進化論などを土臺とする唯物論が其全體といふ結果になつて仕舞ふのである。右に就ては、随分議論の起る事ではあらうが、少くも自分丈は、甚だ憂ふべき事と考へて居る。そして近來續出する進化論的述作(勿論邦文の)が、動もすれば冷笑的・煽動的・破壊的であつて、眞摯的・秩序的・建設的でないに對し、少からざる遺憾を感じて居るものである。

(南北生)

新著紹介

●新着論文(三)

(*)印あるは抄録欄に抄出しあり

(一) 丸川久俊。——『堪察加西岸産鮭鱒の壯成年齡と其漁獲量との關係。』(『水産研究誌』二月號。)

(一三) 日暮忠。——『淀川筋の鮎。』(同上。)

(一四) 壁島爲造。——『海水に混ざるコレラ菌と鹹水魚との關係。』(『細菌學雜誌』二月號。)

(一五) 山田信一郎。——『黃熱病の傳播者たる「ステゴミニア」フアシアータの本邦に於る分布に就て。』(『衛生學傳染病學雜誌』二月號。)

●『淺海利用調査報告』

理學士平坂恭介君が官命に

より大正三年中調査報告せる所を一括して水産局より出版せるものなり。今回の第一回にして區域は東京灣に限らる。第一章地形に關す調査、第二章水漁に關する調査、第三章生物に關する調査、第四章産業に關する調査、第五章結論の五章に分ち、外に附録として重なる介類の食餌を論ず。其中動物學に關係ある各項の梗概は抄録欄に抄出し置きたるが、四六倍判約百頁、圖版並に附表十數個、調査綿密にして特に著者は繪の嗜みあり、趣味の廣き人なる丈、各種圖版の出來榮え甚だよし。(二月十七日水産局發行、非賣品。)

(永澤六郎)